

ちよつといつ話

第三九二 七つの施

中日新聞によれば、今年没後百年を迎える夏目漱石の屏風（一枚折り二双）に書かれた漢詩が見つかつたそうです。漢詩は禪林句集の「一節」で「始随芳草去 又逐落花回」始めは芳草に随つて去きまた落花を逐うて回る」最初は香るばかりの若草に誘われて行き、さらに桜の花が散るのを追つて帰つてきた。「風狂螢墮草 雨驟鵲驚枝」風狂して螢草に墮ち、雨驟にして鵲枝に驚く」急に強まった風に螢が草に落ち、にわかによりだした雨に、木の枝に止まつたカササギが驚く。花が向かい合う様に咲開いている。「夜静溪聲近 庭寒月色深」夜静かにして溪声近く、庭寒うして月色深し」静かな夜、溪流の音がまじかに聞こえ、寒さがみなぎる庭にかかる月の色が深みを帯びて感じられる。以上の四種が書かれていました。参考までに紹介させて頂きました。我々は自然の中に身を置くも心にゆとり少なく、茫々と過ごし、すぐに他を利する教えを忘れてしまうのです。佛の教えに**財の無い者にもできる七施があります**。友松諦道師訳一には**和顔施**「ほほえみをもつて人に接すれば、だれの心も和むであろう。二には**慈眼施**「慈しみの眼をもつて接すれば、だれの心も和むであろう。三には**愛語施**「真心のこもった言葉をもつて語りかければ、だれの心も明るくなるであろう。四には**心慮施**「人の悲しみや苦しみを吾がものとして人に接すれば、だれの心も安らぎを得るだろう。五には**捨身施**「心温かく身を粉にして人に接すれば、だれの心も打ち解けるであろう。六には**房舍施**「思い合いの心をもつて人に接すれば、だれの心も温まるであろう。七には**床座施**「控え目に譲る心をもつて人に接すれば、だれの心も平かになるであろう。我々は**共生の世を助け助けられながら手を取り合つて、己を欺くことなく、己に甘える事無く、仏法に背く事無く、精進努力しましょう**。

市原豊太師訳の無難禪師 即心記」の初めに 悪心は利己心のことで、これが迷いの根本だ。しかも自分の身といつても実は自分の身ではない。それを我がものと思うのは、至って浅はかで悲しいことだ。誰も知っていることだが、人は死ぬもの、病気になるもの、貧苦を受けるものである。これ自分が自分のものでないことの証拠だ。」と、自意識や色々な考え方もあり、成程 一見乱暴にも思えますが私は穿った考え方と受け止めます。

過去の話をすれば辛かつたことや悲しかつたことが 甦ります、又、そんなつもりでなくてもあの人がこうだつた、この人もこうだつたと自然に悪口ができてしまいます、これはこわいことです。佛様は人の悪口や、人を怨んだり、悔んだりする事が大嫌いです。ですからなるべくいい話をするようにこころがけましょう。ほんのり、ほのぼの、ほとけさま」と、佛様は何でも寛容に聞いてくださいます。前述した様に人間は七施を実践すれば静い起こらず、酒井上人の話と同じです。難しいかもしれませんが早速実行しましょう。

七草法要は十三日です。忘れまじ

二十八年二月一日

善壽界善入院油掛地藏尊